

# ハプスブルク帝国下のコメニウス

## ——チェコとオーストリアの場合——

松岡弘

### 1. 問題の所在

ヤン・アモス・コメンスキー (Jan Amos Komenský, 1592-1670。ラテン語名コメニウス。以下の記述ではこれに統一する) は、オーストリア・ハプスブルク帝国下のチェコが生んだ大教育学者である。千野 (1999) がコメニウスを「広い分野に依然として強い影響を与えている中世ヨーロッパの巨人」で「チェコが生んだ polyhistor」<sup>(1)</sup> (チェコ語での意味で「教多くの学問分野の専門家」) と呼ぶように、コメニウスの思想とその影響は教育の分野に限定されない。

だが目下のところ、筆者の関心はコメニウスの言語教育の理論とその実際の応用に限られている。コメニウスの『大教授学』(Didactica magna) に言語教授法の最も基本的な姿を見たことが筆者のコメニウスへの関心の出発点でもあるからだが、その後、コメニウスの著した言語教科書などを検討しながら、その構想と手法が現代の言語教育理論としても十分通用する普遍性と現実性をもつことをますます実感し、それを検証することが筆者の当面の課題となっている。

一方、それと同時に、このように時代を超越した、ないしは時代を先取りした言語教授理論が、コメニウスの生きた17世紀、その後続く18、19世紀の教育の現場、彼の祖国チェコ (ボヘミア並びにモラヴィア) またはオーストリア帝国内の諸地域で果たして実践されたのであろうか、実際はほとんど無視されてきたのではないかという疑問も生じてきた。

そう思うようになった一つのきっかけは、コメニウス関係の書物において通常は高い評価をもって語られるコメニウスが、1世紀前のオーストリアで刊行された『Enzyklopädisches Handbuch der Erziehungskunde』(教育学百科事典) において、約11頁にわたって詳細にコメニウスが紹介されてはいるものの、同時に彼の教授法や教科書への厳しい批判も並べられていたことである。この教育学百科事典は当時のオーストリア帝国内の教育関係者を中心に、ロース (Joseph Loos) が編集者となって編纂したもので、ロース自身多くの項目を担当執筆し、彼の主たる業績とみなされている<sup>(2)</sup>。

ハプスブルク家の支配に抗して戦ったチェコの人コメニウスに対して、支配者の側に立つ教育学者の評価が辛くなるのはわからなくもないが、それにしても一般のコメニウス評価とかけ離れているという印象をもった。そうしたことから、コメニウスの祖国チェコ及び統治者側のオーストリアにおける彼の言語教育理論に対する評価と利用の実態に興味を抱くこと

になったのである。本稿では、上に述べた疑問に向けての作業の一部として、17世紀以来のハプスブルク帝国下の、特にチェコにおけるコメニウス評価を概観する。

## 2. ハプスブルク帝国下のチェコとハンガリー

最新の歴史概説書で「ドナウ・ヨーロッパ」と命名・総称されたオーストリア、チェコ、ハンガリー3国の、歴史的相互関係をごく簡単に記しておきたい<sup>(3)</sup>。

これら3国は中世においてはそれぞれ独立した王国を築き、互いに拮抗する勢力関係にあったが、15世紀から16世紀にかけて、いくつかの重要な婚姻関係の樹立を通してオーストリアのハプスブルク家が支配権を拡大した。そして最終的には、ボヘミア・モラヴィア（チェコ）の王位継承者にしてハンガリー王であったルードヴィヒ（ラヨシュ二世）がオスマントルコとの戦い（1526）で戦死したことにより、彼の義兄であるハプスブルク家のフェルディナンド一世がハンガリーとボヘミア両王国を所有することになり、ここにハプスブルク家が両国を支配下におく体制が生まれた。

この間の、またその後のヨーロッパ内の政治情勢や勢力関係について、全体的に要領よくまとめるのは筆者には容易ではないので、次節の論述と関連する点だけを挙げておく。

まず宗教に関しては、ハプスブルク家は神聖ローマ帝国の皇帝として一貫してカトリックであり、その守護者であった。一方チェコは、ハプスブルク家の支配に服するようになってからも貴族の力が強く、そこに宗教改革の波が及んでプロテスタント勢力が強まった。しかしながら、チェコのプロテスタント貴族がハプスブルク皇帝軍と相みえ敗北したピーラー・ホラ〈白山〉の戦い（1620）以後プロテスタント貴族は壊滅し、カトリック以外の信仰はボヘミア・モラヴィア（チェコ）国内では禁止された。コメニウスは16世紀チェコの宗教改革者フスの流れをくむボヘミア兄弟団の牧師で、また教団の指導者であったから、この年以後は国内逃亡を余儀なくされ、1628年にはポーランドに脱出し、それ以後祖国へ戻ることはなかった。

一方、ハンガリーはオスマントルコの侵入により1541年以後は3分割され、ハプスブルク支配域、東ハンガリー王国（後のトランシルヴァニア侯国）、そして中・南部のオスマントルコの直轄領となっていたのであるが、1686年から1687年にかけてハプスブルク家皇帝軍がオスマン軍をハンガリーから駆逐し、次いでトランシルヴァニアにも侵攻し、1699年のカルロヴィッツの和約で旧ハンガリー王国領はハプスブルク家の支配に服した。

こうして「1526年に開始された企図が、1699年に領土的にほぼ実現された」<sup>(4)</sup>のであるが、宗教については、ハンガリーではプロテスタントが支持されて浸透し、特に東部のトランシルヴァニア侯国（第一次大戦以後はルーマニア領）では、プロテスタントのトランシルヴァニア侯の下に宗教的寛容が徹底し、その後ハプスブルク家の直接支配を受けるようになってからも信仰の自由が保障され、ハンガリー内の3分の2を占めるプロテスタントの地域を形成することになる。

なお民族に関しては、ボヘミア・モラヴィアはチェコ人、即ちスラブ系住民を中心として

いるが、13世紀から14世紀にかけて特にドイツからの植民運動が続き、国境沿いの地方や都市を中心にドイツ人が多数を占める地域が形成された。一方、ハンガリーはマジャール人を中心としているが、国内にはスラブ系住民（スロヴァキア、クロアチアなど）、ラテン系住民（トランシルヴァニア）、さらには12世紀にはトランシルヴァニア、ハンガリー北部にドイツからの植民者が多く移り住んでいて、一種の多民族の国となっていた。

### 3. チェコにおけるコメニウスの受容

このことに関しては、現在チェコにおけるコメニウス研究の第一人者といわれるチャブコヴァ (Dagmar Čapková) にまさしく筆者の関心と疑問に答えた論稿<sup>(5)</sup>があるので、以下では主にこれに依りつつ、コメニウスが生きた17世紀とそれ以後のチェコにおけるコメニウス受容を見てみよう。

1620年のピーラー・ホラにおける敗北により、カトリックでない教師はチェコより追放され、それまでのプロテスタントを基礎に置いた高度の教育システムが崩れ国内の教育水準が低下した。その後の学校教育はイエズス会に任されたが、町や村の10分の1しか学校を持っておらず、その学校も教師の家がそれを兼ね、そこに通うのは男子の4分の1程度で女子は除外された<sup>(6)</sup>。そうした中でコメニウスの著書は、当時ヨーロッパの多くの国で刊行された『言語の開かれた扉』(Janua linguarum)を除いては18世紀の最後の四半世紀の啓蒙期(ヨーゼフ二世の時代)まで禁書目録にその名を記され続けた<sup>(7)</sup>。

ただここで余り知られていない重要な事実がある、とチャブコヴァはいう。それはスロヴァキアの状況であり、ここでは宗教改革の途切れることのない伝統と、コメニウスの著作とチェコ語が後にチェコが国民国家として再生するまで守り伝えられ、最初はゆっくりと困難を伴いながらであるが、ボヘミア、モラヴィアへと広がった。スロヴァキアは、ボヘミアとモラヴィアがオーストリア帝国の一地方となったように、政治経済の面ではハンガリー王国の枠の中にあっただが、ボヘミア、モラヴィアとの文化的なつながりは古代から強く、特に人文主義期及び宗教改革の時代にはルター派や部分的ではあるがチェコの改革派がそこに移り住んでいたのである。

ハンガリー王国内のスロヴァキアでは、反宗教改革側の圧力にもかかわらずプロテスタントの学校が存続し、コメニウスの著書が教科書だけでなく宗教関係の著作もチェコ語で発行された。特に『開かれた言語の扉』、『開かれた言語の扉の前庭』(Vestibulum linguarum)、そして『世界図絵』(Orbis pictus)が多くの版を重ね、スロヴァキアに住む3民族の学校(スロヴァキア語、ハンガリー語、ドイツ語の学校)で用いられた。またスロヴァキアには1620年以後チェコからの亡命者が多くあって、コメニウスが1650年代に(ポーランドの)レシュノを出発して(ハンガリーの)シャーロシュ・パタクに向かう際もまったく支障なく移動し、そこで教育改革に従事することができたのである。プロテスタントのスロヴァキア人は1844年まではチェコ語を文章語として用いていて、18世紀のボヘミアとモラヴィアでは手に入らなかった、チェコ語で書かれた重要な教育理論書(D. Lehocky, S. Tesedikによる)

が生まれた。これらの著書の立場はコメニウスの思想に近かった。このように、スロヴァキアにはコメニウスの伝統があり、さらには、スロヴァキア人がドイツのルター派の大学——特にハレ、イエナ、アルトドルフではコメニウスへの高い評価が依然生きていた——に学んだことによってさらに強められた<sup>(9)</sup>。

18世紀の後半にハプスブルク家はマリア・テレジア並びにヨーゼフ二世による進歩的改革が行われるが、特にイエズス会の解散と1774年の啓蒙思想に基づく教育改革はボヘミアの教育にとっても重要な一時期を画すことになる。ただこの間、ヨーゼフ二世はハプスブルク領土における公用語をドイツ語に統一するという言語令を発したが(後に撤回された)、こうしたドイツ語化への圧力がチェコ人の民族再生のプロセスを加速させ、19世紀前半にはチェコ語を授業言語とする小学校(Volksschule)を求める闘争へとつながり、1848年には最初のチェコ語高等小学校(Hauptschule)、1850年に最初のチェコ語中・高等学校(Gymnasium)、1849年に最初のチェコ語実業学校(Realschule)が設立された。チャプコヴァはこうした成果を、コメニウスを含むチェコ民族の伝統と関連させている<sup>(10)</sup>。

19世紀の後半には学校におけるドイツ語とチェコ語の完全平等が法的に認められる<sup>(10)</sup>が、これは西ヨーロッパの国々と比べても特記すべきことであった。チェコ語、すなわちチェコ人にとっての母国語の見直しには、コメニウスの愛国的な言語関連の著作も1830年代までに模範的なチェコ語としての役割を果たしたが、コメニウスの教育関係の著作の民族意識への浸透は極めてゆっくりと進み、それも最初は特にスロヴァキアの啓蒙主義者の影響が大きかった<sup>(11)</sup>。

1870年代の諸法令は学校教育に対する遠大な啓蒙理念の実行であり、義務教育は6才から14才までとなった。1882年には大学がドイツ語大学とチェコ語大学に二分され、学校制度のすべての段階でチェコ語とドイツ語の二本立て体制が完成する。そのチェコ語大学の初代教育学・哲学教授はリントナー(G. A. Lindner)で、コメニウス思想の解釈や応用において重要な役割を果たした。彼は、コメニウス精神に則り、理論と実践の総合を強調した。また、民族間の対立が続く中で、チェコのB. K. B. StorchやV. B. Kvetは1850年代にドイツ人学者とも協力して、コメニウスの思想を体系的にとらえ、コメニウスを積極的に評価しその影響が大きかった<sup>(12)</sup>。

ドイツ語習得を強制するハプスブルクの言語政策と、田舎では子供も親も教師もチェコ語しか話さないという現実との矛盾の中、教科書類はチェコ語にも翻訳されるという状況となり、18世紀から19世紀にかけてのチェコは一種のバイリンガリズムの様相を呈した<sup>(13)</sup>。19世紀半ばには地方の学校の教師にもコメニウス、ルソー、ペスタロッチー、ディースターヴェーク等の著書に刺激を受けて活動するものも出てきた。中でもコメニウスに関する論文を書き、チェコ語版『大教授学』を編集し、『世界図絵』を現代化したK. S. Amerlingは最も重要である<sup>(14)</sup>。

以上、祖国チェコ並びにオーストリアで禁書とされたコメニウスの著作やその思想がスロヴァキアで保持され、18世紀後半から19世紀初めごろからチェコで再び影響を及ぼし始める有様を、チャプコヴァ(1992)に依りつつ見てきた。

同様な調査をブシェロフのコメニウス博物館のヒーブル博士 (František Hýbl) も行い、発表している。チャプコヴァ (1992) を補う部分を取り出してみよう。J. L. Ziegler や F. Palacký のお陰で、19 世紀の初め頃からコメニウスへの関心はかなり高まり、J. V. Svoboda と K. S. Amerling はコメニウス思想を教育実践に応用した。また、コメニウス生誕 200 年並びに 300 年記念の後でコメニウス研究の伝統が定着した。だがこの頃はまだ、ハプスブルク家とカソリック教会にはコメニウスは受けが悪く、そのためチェコの多くの教師たちは、コメニウス記念碑の除幕式、コメニウスの像、コメニウス博物館の設立等を行って積極的に普及活動を推進し、さらにコメニウス年報や著書目録などを発行したという。その中には小・中学校の教師が多く含まれる。

当時コメニウス思想の普及に努めた大学教師として、K. H. Leonardi, T. G. Masaryk, A. Gindely, G. A. Lindner, F. Cada, F. Drtina がいる。スロヴァキア人クヴァチェラ (Ján Kvačala) は、ヨーロッパの文書館や図書館の資料を研究しコメニウス研究に多大の成果をもたらした。クヴァチェラは、モラヴィアの大変活動的な中央教師連盟のメンバーと協力して、コメニウス全著作の刊行を開始し、当時の指導的なコメニウス研究者を編集者にしてコメニウスの生涯と著作の研究のための雑誌を刊行した。この雑誌の編集は独立したチェコスロヴァキアのマサリク大学に引き継がれた<sup>(15)</sup>。

以上紹介した二人の現代チェコの代表的なコメニウス学者の報告で、自らの祖国でコメニウスがどのように処遇され、研究されてきたかについての概略は示すことができた。

#### 4. オーストリアにおけるコメニウス受容

18 世紀末まで禁書とされ、またチェコの民族運動やチェコ語使用要求のシンボルとなったコメニウスの著書や思想が、カトリックの国オーストリアで不人気であったことはそれほど奇異なことではない。オーストリアでのコメニウスへの関心の低さは、H. Engelbrecht の 5 巻にわたる膨大な『オーストリア教育制度の歴史』(Geschichte des österreichischen Bildungswesens) にコメニウスへの言及は数カ所にしか見られないことから裏書きされる。一方、これと対照的なのがドイツで、W. Rein が編纂した『Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik』(教育学百科事典) のコメニウスの項には、ドイツの学校におけるコメニウスの著書の普及は異常なほどで、17, 18 世紀の間に多くの都市に広がっていったと記されている<sup>(16)</sup>。また彼への関心は、教授学よりもむしろ汎知学にあったことも述べられている。

最初に名を出したオーストリア人ロース編纂の『教育学百科事典』にもどるが、この元の版の編集者は実は、チャプコヴァがコメニウス学者として高く評価したリントナーであり、1870 年に出版されている。リントナーはボヘミア生まれのオーストリア人で、後にチェコ語プラハ大学の教育学の教授となるが、コメニウスのラテン語『大教授学』をドイツ語に翻訳している<sup>(17)</sup>。さてロースの『教育学百科事典』におけるコメニウスの項の執筆者は Lindner-Schiller となっていて、この時点ではいずれも故人である。筆者が先に指摘したコメニウスに対する否定的記述とは以下の内容を指す。(番号は筆者が適宜つけた。)

- 1) コメニウスの基本には、理解と言葉による表現は絶えず並行して進まなければならないという教育上の理念があると言われているが、このことはすでに考えた人がいた。
- 2) コメニウスが『開かれた言語の扉』によって実物教授の基礎を作ったという、人から人へと口伝えされた仮説があるが、これには証拠がない。
- 3) 『開かれた言語の扉』は生の教授材料で、単なる暗記用である。8000の単語が100章の中の、日常のあらゆる場面からなる1000の文におさめられただけの、かなり疑問のある文体で書かれた語句や例文に過ぎない。
- 4) コメニウスは8000の単語を視覚化することを意図したが、それが不可能であることを気づいたにちがいない。1657年に出た『世界図絵』は挿絵付きの『開かれた言語の扉』以外の何物でもない。
- 5) それにまた、単調で不毛な文章で飾られたこの驚くべき本は、その内容を10回も繰り返すべしとされている。
- 6) コメニウスは過去の教授学者の教科書は教育的価値を持たないと非難し、自分がそのひどい状態を是正したという。しかし彼は、『開かれた言語の扉』の内容は教え切れないという見解に達し、より基礎的な本（『開かれた言語の扉の前庭』）を編纂した。それは1000の単語と500の短い文、それも2種類の品詞だけからなるもので、当然のことながらつまらない内容の文であり、人の興味をとらえ視野を広げるようなものではなかった。
- 7) シャーロシュ・バタクでコメニウスは『開かれた言語の扉』を劇に仕立てたが、それは味気ない駄作で、青年の学習意欲を高めることはできなかった。
- 8) 以上のことから、コメニウス自身が、人からは賞賛された自分の作品に満足していなかったのではないか。『世界図絵』も感覚授業の基礎を作ったのではなく、むしろ疎外する結果となった。なぜなら、動きや立体感が下手な平面図に変えられたからだ。
- 9) これらの著作では、できるだけ迅速にラテン語を習得するという意図の後ろに、内容が完全に後退してしまった。コメニウスは、彼の5つ目の教授法関係の著書『最新言語教授法』(Novissima linguarum methodus)で再度自分の基本理念について弁明するが、そこには教育学的に新しいものは何もない。
- 10) 教育的に荒削りな『開かれた言語の扉』は彼の名声を確立したが、『大教授学』は同時代の人にも後世にもほとんど何の影響も与えなかった。とはいえ、あの時代の書物であれほど完璧にかつ体系的に教授あるいは教育の問題をとり扱い、教育活動の心理的な基礎を作る試みをしたものはない。独自のものといえるのは、その体系的な徹底性だけである。教義自体は、コメニウスはベーコン、ラトケ（以下略）などから学んだのである<sup>(18)</sup>。

以上のようなコメニウスの教授学に対する異常なほどの否定的評価は、全11頁に亘るコメニウスの項の5,6頁目にあり、ここ以外は概ね好意的かつ順当なコメニウス紹介となっている。思うに、この部分はリントナーを引き継いだローズが意図的に書き加えたものではないだろうか。自ら『大教授学』をドイツ語に翻訳し、コメニウスを高く評価してきたリント

ナーの言葉とは思えない。Burger (1995) にも、この百科事典におけるロースの記述の偏りが指摘されている<sup>(19)</sup>ので、この推測はあながち見当違いでもないと思われる。

さて、筆者がコメニウス教授学を否定する内容をこのように詳しく紹介するのは、教師の直感として、これらの評価がある面で真実をついていると思うからである。筆者はコメニウスの言語教科書と言語教授法に現代に通じる普遍性を感じとったが、それは適切な訓練を受けた優れた教師と、その授業を前提として話であって、そうでない場合は、上に書き立てられたような、つまらない授業になる危険性は常にある、といてよい。ロースは、コメニウスの見事なばかりの理念と体系が、形だけ踏襲され実施されている場面を実際に経験した、或いは、それを想像することのできる教育者であったとも考えられるのである。その意味では、かなり意地の悪い評価であっても、問題点を率直に指摘している点でコメニウス教授学をより深く知るための、一つの手がかりを提供してくれるだろう。そして、逆説的な言い方であるが、こうした評価があることが、否定的であれ肯定的であれコメニウスがオーストリアに受容され、生きてきたことの証ではないかと思われる。

## 5. おわりに

コメニウスが同時代の、または続く世代の祖国の人々によって果たして読まれたのかという疑問に対してはチャプコヴァとヒーブルが答を与えてくれた。ロースの『教育学百科事典』の記述はやや極端であるにしても、オーストリア側でのコメニウス評価と存在の仕方を示している。

さて、コメニウス自身は自らの教授法と自らの教科書を使ってどのように教えたのか。後の世代のコメニウス信奉者は理論と実際とのずれに悩まなかったのか。『開かれた言語の扉』や『世界図絵』はどのように使われ、効果をあげたのか。また、コメニウスを祖国、言語、宗教を同じくする立場から熱く支持してきた側と、そうではない立場から冷めた目で眺めてきた側とで、言語の教授観はどのように異なり、どのように似通っているのか。

筆者の目標は、コメニウスの言語の授業は実際にどのようなものであったか、そして人はそれをどのように受け継ぎ実践してきたかを探ることであり、そのことがコメニウス教授学、特に彼の言語教授理論を現代に甦らせるための必須の条件であると考えるが、本稿ではそこへ至るまでの基礎作業として、チェコとオーストリアのコメニウス受容を概観した。

## 注

1. 千野榮一『ことばの樹海』青土社 (1999), p. 130.
2. Engelbrecht (1986) によると、Joseph Loos (1853-1921) はボヘミア出身のヘルバルト派の教育学者で、プラハとウィーンのギムナジウムでラテン語とギリシャ語を教えた経験がある。1898年以後は州の教育視察官としてリンツに招かれ、『教育学百科事典』編纂により教育界に大きな影響を与えたという。

3. ゲオルク・シュタットミュラー〈丹後杏一訳〉『ハプスブルク帝国史』(1989) および南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』(1999)を参考にしてまとめた。
4. 『ハプスブルク帝国史』(1989), p. 67.
5. Čapková, Dagmar (1992) Einige ökonomische, soziale und ideologische Probleme der Bildung und Erziehung in den tschechischen Ländern im Zeitabschnitt von 1620 bis 1918. auch unter Bezugnahme auf das Werk J. A. Komenskýs (1620年から1918年の間の, チェコにおける教育にかかわる経済・社会・思想上のいくつかの問題—コメニスキの業績に関連して—)。この論文は1988年10月にオーストリアで開催された「オーストリア教育史シンポジウム」での講演を元としている。
6. Čapková (1992), p. 344.
7. 同上, pp. 345-346.
8. 同上, pp. 346-347.
9. 同上, pp. 347-348.
10. 1867年のアウスグライヒ(妥協)により, ハプスブルク帝国は, オーストリア=ハンガリー二重君主国となった。オーストリア側は一般にはライタ以西と称されるが, ここでは1867年12月に新憲法が發布され, そこに帝国内の民族と言語は完全に平等の権利を持つことが明記された。
11. Čapková (1992), p. 350.
12. 同上, p. 356.
13. 同上, p. 357.
14. 同上, p. 358.
15. Hýbl (1992), p. 88.
16. Bayreuth, Berlin, Cassel, Danzigなどの他, 42の都市の名が挙げられている。かつてコメニウスが住み, 後にドイツ領となったポーランドのElbingとLissaも含まれている。
17. G. A. Lindner (1828-1887) 訳のコメニウス『大教授学』は, “Comenius'grosse Unterrichtslehre”, 1886年にウィーンで刊行されている。なお, リントナーの著書の一つが『倫氏教育学—湯原元一譯補』として明治26(1893)年に日本に紹介されている。
18. Loos (1906), pp. 205-206.
19. Burger (1995), p. 31.

#### 参考文献

- ゲオルク・シュタットミュラー〈丹後杏一訳〉(1989), 『ハプスブルク帝国史』刀水書房。  
南塚信吾編(1999), 『ドナウ・ヨーロッパ史』山川出版社。  
Burger, Hannelore (1995), *Sprachenrecht und Sprachgerechtigkeit in Österreichischen Unterrichtswesen 1867-1918*. Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. Wien.  
Čapková, Dagmar (1992), Einige ökonomische, soziale und ideologische Probleme der

- Bildung und Erziehung in den tschechischen Ländern im Zeitabschnitt von 1620 bis 1918. auch unter Bezugnahme auf das Werk J. A. Komenskýs. in "E. Lechner, H. Rumpler, H. Zdarzil (ed.), *Zur Geschichte des österreichischen Bildungswesens*", Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften. Wien.
- Engelbrecht, Helmut (1984), *Geschichte des österreichischen Bildungswesens*, Bd. 3. Österreichischer Bundesverlag. Wien.
- (1986), *Geschichte des österreichischen Bildungswesens*, Bd. 4. Österreichischer Bundesverlag. Wien.
- Hýbl, František (1992), Učitelé-šřřitelé myšlenek J. A. Komenského, které se konalo v Přerově ve dnech 3.-4. prosince 1991 (Teachers as Propagators of Comenius' Ideas, in Papers presented at the colloquy on the theme of Teachers as Propagators of Comenius' Ideas, held in Přerov on 3 and 4 December 1991). Přerov.
- Loos, Joseph (ed.) (1906), *Enzyklopädisches Handbuch der Erziehungskunde*, Bd. I. Wien-Leipzig.
- Rein, Wilhelm (ed.) (1903), *Encyklopädisches Handbuch der Pädagogik*, Bd. 1. Langensalza.